

# 平成26年度運営諮問会議

1. 日 時 平成26年12月15日(月) 10時00分～12時00分

2. 会 場 宇部工業高等専門学校 大会議室(管理棟3階)

## 3. 出席者

○運営諮問会議委員(五十音順・敬称略)

進 士 正 人 委員	千 葉 泰 久 委員
津 田 賛 平 委員	徳 永 敦 之 委員
師 井 浩 二 委員	山 田 隆 裕 委員

○宇部工業高等専門学校教職員

三 谷 知 世 校長	薄 井 信 治 副校長
小 倉 薫 校長補佐(教務主事)	岩 元 修 一 校長補佐(学生主事)
武 藤 義 彦 校長補佐(寮務主事)	藤 田 活 秀 専攻科長(国際交流室長兼務)
三 谷 芳 弘 情報処理センター長	藤 田 和 孝 地域共同テクノセンター長
福 地 賢 治 技術室長	吉 田 政 司 機械工学科長
橋 本 基 電気工学科長	三 宅 常 時 制御情報工学科長
内 田 保 雄 経営情報学科長	山 下 祐 志 一般科(文系)科長
中 村 貢 治 一般科(理系)科長	
前 川 幸 枝 校長補佐(事務部長)	藤 田 勝 律 総務課長
廣 兼 敦 学生課長	

(陪席)総務課副課長、学生課副課長、企画連携事務室副室長、総務係員

## 4. 日 程

10時00分 開 会

校長挨拶

出席者紹介

資料の確認

議 事

一、議長選出

二、議長挨拶

三、議題

10時10分 1. 宇部高専の特色ある取組 【資料1】

(質疑)

## 2. 宇部高専の国際交流の取組 【資料2】

(質疑)

11時40分 校長謝辞

11時42分 閉会

11時45分～12時00分 太陽光発電に関する研究の視察

## 5. 配付資料

○平成26年度運営諮問会議 開催要領

○運営諮問会議委員名簿

○平成26年度運営諮問会議 座席表

○議事資料

議題1：資料1「宇部高専の特色ある取組」

議題2：資料2「宇部高専の国際交流の取組」

○運営諮問会議規則

○平成26年度宇部工業高等専門学校 学校要覧

○参考資料

- ・図書館だより
- ・読書感想文コンクール 入選作品集
- ・宇部工業高等専門学校 第3期中期計画
- ・平成26年 宇部高専年度計画
- ・平成26年度宇部工業高等専門学校の動き

# 議 事

## (1) 開会

総務課長の進行により、運営諮問会議が開会された。

## (2) 校長挨拶

本日は、御多忙中の中、本校運営諮問会議に御出席いただき誠にありがとうございます。本校は、2年前に創立50周年を迎え、次の50周年に向けて教職員一同、教育、研究、管理・運営に邁進してまいります。全く先の読めない新たな50年ということで、いろいろな御意見をいただきたいと存じます。

## (3) 出席者紹介、資料の確認

総務課長から、本日出席の運営諮問会議委員と本校教職員が紹介された。

引き続き、配付資料の確認が行われた。

## (4) 議長選出

総務課長の進行により、本会議の議長として進士委員が選出された。

## (5) 議長挨拶

工学部の進士でございます。校長が挨拶されたように、これから先の教育、研究、管理・運営をどのようにするかを検討する際には、この運営諮問会議で意見を伺うということは非常に重要な機会であると思いますので、委員の方からの意見をご参考にさせていただきたいと思います。

## (6) 議事

(議長)

それでは、開催要項に沿って、議事を進めていきたいと思いますが、運営諮問会議規則によりますと、第2条に審議事項として、教育研究上の目的を達成するための基本的な計画に関する重要事項、教育研究活動等の状況について本校が行う自己点検・評価に関する重要事項、その他本校の運営に関する重要事項となっており、3つについて審議し、校長先生に対して助言をすとなっております。各委員におかれましては、宇部高専に対しての助言、ご意見等をご自由にお聞かせ願いたいと思います。

本会議の進行方法としまして、始めに宇部高専側から議題に対して説明していただき、その後、意見交換をお願いいたします。

まず、議題1、宇部高専の特色ある取組について、御説明をお願いします。

(校長)

パワーポイントを使いまして、簡単に特色ある教育について御説明いたします。

私自身も4月に宇部高専に赴任いたしまして、ある種、新鮮な目で宇部高専をこの数カ月、見てまいりました。

最初に数字で宇部高専の概要を御説明したいと思います。その後、宇部高専の教育方針、そして特色ある取り組みを4つほど取り上げます。続いて、新規購入装置、これはアベノミクスの一環でございまして、大学もそうですけども、高専にも高価な装置が入りましたので紹介をさせていただきます。更に進路の状況、学生諸君の活躍の状況、卒業生の活躍の状況について、簡単にお話させていただきます。

本校は、1962年の創立で、2年前に50周年迎えました。

敷地は、国立高専51校の中では2番目に小さいという規模でございます。ただ非常に効率的に建物が配置されていますので、教育上、全く問題はないと思います。

学生数は1,000名を超えておりまして、女子学生が274名、現在、全国の国立高専の中では、4番目に女子学生の多い学校でございます。

教職員でございすけども、教員が80名、そのうち女性教員が9名、来年4月にもう1名着任いたしますと、女性教員が10名になります。この数は国立高専の中では少なくはないですけども、多いほうとも言えない状況でございます。ただ現在、男女共同参画ということで、政府も女性の登用を進めておりますので、本校にとりまして、女性教員のさらなる数のアップは必要と考えています。職員は、47名のうち女性が15名で、相当数の女性が働いております。

博士号取得者は63名、全教員の約8割が博士を持っております。

クラスは、25クラス（5クラス×5学年）、専攻科もございます。

寮生は270名、このうち女性が50名です。

蔵書数は約14万冊。これは国立高専の中では比較的多いほうかと思えます。

入試倍率は1.6倍という状況でございます。

それでは、宇部高専の教育方針について、幾つかお話いたします。

技術者の養成と言いましても、基本的には人間の養成、人を育てるということですので、豊かな心とすぐれた感受性、それから5年間の一貫教育でありますけども、幅広い知識を持つ人間に育てるということでございます。

それと、昨今は非常に日本中が注目しています豊かな国際性ということでございます。

私のほうから、豊かな心とすぐれた感受性、幅広い知識に関する特色についてお話いたします。国際性につきましても、この後、専攻科長兼国際交流室長の藤田教授からお話をさせていただきます。

最初の特徴ある取り組みですけども、本校は、高等学校3年に相当する若い学生が入ってきますので、読書感想文による感受性とか、いろいろな感性を磨くということが大事だということで、一般科の国語の先生方と図書館の教職員が協力しまして、毎年コンクールを実施しています。毎年、600件近い感想文を選定いたしまして、優秀者を選んでおります。皆様方のお手元に去年の入選の作品集がございます。お時間のあるときで構いませんので、是非ご覧いただきたいと思えます。

これを読みまして前図書館長の最初の言葉、非常に心にしみました。それから、学生の作品が極めてよく考えて書かれていると思えました。今年度も行いまして、2月に冊子を発行する予定でございます。

優秀者を校長室に招いて、いろいろ話を聞きました。3名の学生でしたけども、非常に内面的に豊かなものを持っている学生達という感想を持ちました。高専の場合、一般教養が少ないけれども、その中で先生方が非常に工夫をされて、読書一行感想カード、年間20冊を読もうということで、簡単な感想を書か

せるということをされております。

もう一つは、マトリックス型基盤教育プログラム。これは1年から3年の学生に対してのプログラムでございます。例えば、1年生では高専とはどういうところかということも含めた新入生の合宿研修、それから、高専手帳というスケジューリングをさせるための手帳を1年生に与えて、自己管理をさせています。更に、テクニカルライティング。公害に関しては、宇部は非常にすぐれた取り組みをしてきましたので、そういったことを彼らに学ばせております。

2年生になりますと、情報倫理、エネルギーの問題、多文化理解等について、また中には企業の方々の講演も入れております。

3年生では、技術者倫理、安心・安全、自分自身のこれからのキャリアデザインについて学ばせるというたことを取り入れています。来年度から単位化する予定でございます。

もう一つは、地域の、特に小中学生に対する理科教育やものづくり教育に学生が出向いて後輩になる子ども達にもものづくりや、理科のいろいろな実験等をさせるということで選択科目として1単位与えております。2013年度は14の小中学校で約800人の受講生を指導いたしました。

さらに「宇部高専テクノフェア」と称しまして、本校の地域共同テクノセンターと、産学連携組織であります宇部高専テックアンドビジネスコラボレイトという組織で共同して行っているもので、企業の説明会、企業の方々が学生に対してどのような企業であるのか、どんな仕事をするのかということをお話してもらっております。専攻科の学生ポスター発表ですが、企業の方々に向けて自分の研究についてのプレゼンテーションを行います。昨年度の場合には、企業の方と共同研究をしている教員がおりますので、その成果を発表いたしました。それから、4年生及び専攻科1年生にインターンシップの企業についての紹介等を行いました。

小中学生に対して或いはテクノフェアでは企業の方々に対するいろいろな情報発信をしております。

先ほどお話ししましたように、アベノミクスということで、全国の高専51校で280億円を超える予算が措置され、本校も相当高価な機械を入れていただきました。太陽光発電システム、マシニングセンター、閉鎖水域のシミュレータ、顕微鏡等数々です。これらの装置を使って、今後、特色ある教育研究に発展させるべく努力をしているところです。トータルで21の設備・施設が本校に設置されました。総額約5億円を超えております。

この3月の卒業生の進路状況ですが、本科卒業生213名のうち7割の148名が就職です。残りが専攻科、大学編入等の進学です。就職者のうち県内の山口県に残ったのが33名です。大変ありがたいことに求人数は、このように15.9倍になっております。

現在、2014年度の就職・進学の活動が進んでおりまして、11月30日現在で内定率が96.8%です。進学につきましては、進学内定率は92.5%ということです。

今年度の主な就職先は、このように県内のそうそうたる企業さん、県外につきましても同じです。

進学先として宇部高専専攻科が多いですが、名だたる国立大学にも進学しております。

今年度も学生諸君、大変活躍してくれました。ここには昨年度と今年度のいくつかを記してございます。ETロボコンというのは、全国高専ロボコンとは少し異なりますが、昨年度は全国優勝いたしました。また、高専のプレゼンテーションコンテストで優勝いたしました。卒業研究、特別研究でも学会賞をいただ

きました。今年度もE Tロボコンでは中国四国大会で優勝しましたが、残念ながら全国大会では全国優勝にはなりません。全国大学ビブリオバトルという本を読んでその書評について発表するコンテストですが、中国Cブロックで優勝いたしました。それから、そろそろ卒研とか特別研究の成果が出てくるころですが、高分子関係の国際会議で1名、優秀賞をいただきました。高専の専攻科からは、本校の学生1名、あとは大学院生というふう聞いております。

本校も52年を経過しまして、卒業生が各分野で活躍しております。特許事務所を開いている方とか企業の幹部になられた方、あるいは県会議員になった方、大学の教授になられた方、ベンチャービジネスを立ち上げた方、世界的に有名なアメリカのNIH国立衛生研究所の研究员になった方、公認会計士になった方、もう一人、ぜひ知っておいていただきたいのが浅村さんという方。この3月に卒業しまして、宇宙航空研究開発機構JAXAに就職しまして、10月に打ち上げました“ひまわり8号”、それから12月に打ち上げました“はやぶさ2”、これの製造にかかわったということでございます。“はやぶさ2”の打ち上げに際しては、ネットでの解説を任されたというふう聞いております。

簡単ではございますが、本校特色と、学生、卒業生の活躍の様子についてお話させていただきました。

この後、年度計画について、副校長の薄井教授から簡単に説明をさせていただきます。

#### **(薄井副校長)**

では、年度計画に関する補足説明をしたいと思います。

資料は下の方の平成26年度宇部高専年度計画です。今年から高専機構第3期中期計画というのが始まりました。第3期になって、高専機構がイニシアチブをとるということなので、年度計画も高専機構に対応して策定しています。それがわかりやすく見えるように印刷しております。

宇部高専独自のものは、それにつけ足すという形にしております。昨年度の運営諮問会議において、第2期中期計画の点検について御指摘がありました。その1つの事項を年度計画の中に入れております。これが2ページ目の下のほうの担当部署が「自己点検・評価委員会」というところの(4)の⑤です。「年度計画を着実に実施するため、必要に応じて成果指標を設定する」ということを指摘されましたので、その御指摘に従って設定するようにしております。今年度は、先ほど申しましたように、年度計画の策定方法が変わりましたので、フォローアップという形で中間報告を受けて、それをもとに現在、数値化できるものに関しては数値化するため検討中です。

もう一つは、年度計画には入っておりませんが、運営諮問会議で御指摘のあった事項で、「教育改善におけるPDCAサイクルがきちんと回るための仕組みが機能できていないのではないか」との御指摘がありました。これについては各ネットワーク組織が教育改善のために課題、問題点を上げ、それに対して改善のためのアクションを考え、それを踏まえた点検結果を議事録に書き込むようにフォーマットをつくるというところまで来ています。今検討中で、もう少しで完成する予定です。

以上です。

#### **(議長)**

ありがとうございます。議題1といたしまして、宇部高専の特色ある取り組みということに関して、御説明を校長先生と副校長先生からいただきました。両方の説明に関しまして、委員の方々、御質問、御意見等ございましたらお願いいたします。

**(千葉委員)**

特色ある取り組み2のところ、2年生に「企業人講演等」ということが書いてありますが、実例としてどんな方を呼ばれて、どういうお話を聞かれたのでしょうか。

**(校長)**

宇部高専T&Bという産学連携組織がありますが、会長の金重様にお願ひしました。そのほかにも来ていただきました。

**(千葉委員)**

すぐに回答できないということでは、非常に意識が薄いと言わざるを得ない。なぜ、企業人を呼んで授業されて、指導されていることに対して、何を付加するかということをもっと先生方が意識されないとおかしいです。だから、どういう形で、どういう講師を呼ぶかとかいったことは、今そこで誰だったか回答できなようではおかしいのではないですか。

**(校長)**

わかりました。今後、その点につきましては、何故この方を呼ぶのか、学生にどういうことを伝えるかということをおある程度、認識した上で計画・策定をしたいと思ひます。

**(千葉委員)**

実例を言ひますと、私は一昨年だったか、東京工大において、企業倫理や技術者の育成といったことについて企業でどういう経験をしたか講義を2時間半。学生の必修で、その中に、こういう6人がしゃべるから、その中で半年計画のカリキュラムに入れているということなので受けました。

それから、福岡大学で約1時間半の講義で、30分のディスカッションという形。去年は「企業倫理」について、今年「若者に伝えたいこと」ということで、1年前から依頼があつて、シラバスを出してくれ、指針を出してくれというところまで話がありました。大学が企業の経験とか、そういったものを入れたいというような気持ちあるのであれば、単にここに書くだけじゃなくて、きちんとどういう方を呼んで、どういう話をしてもらうかと、それがどういう影響を受けるかということをお真剣に考えるべきではないかというふうにお思ひます。

**(校長)**

ありがとうございます。今後、そのように綿密な計画のもとに実施したいと思ひます。

**(議長)**

1年、2年、3年というのは、いわゆるイメージでいうと高校生ですね。

**(校長)**

そうですね。

**(議長)**

企業ということのイメージ、どうでしょうか、まだ学生というよりは生徒というか、高校生のイメージなので、企業ということは高校生、高専生にイメージはできているのでしょうか。

**(校長)**

正直なところ、全員が将来技術者を目指すというところまではまだ行ってないです。一部の学生については、入学前からそういう意識がはっきりしてはいますが、平均的に見るとまだまだです。

私の経験から言うと、大体4年生が企業で2週間程度のインターンシップをしますけども、そのあたりでかなり変わってくる場合があります。もちろん学年を追うごとに、少しずつ認識されていくということは、平均的には言えると思います。

**(議長)**

大学の企業人講演と高専の企業人講演と違う印象をもつのですが、いかがでしょう。

**(千葉委員)**

私は職業柄、この地域の中学生に講演をしたことはないですが、特に印象があるのが、呉にある海上保安大学です。彼らは国を背負って立つというのが1年生ぐらいから皆あるようです。目的意識といったものが。

何故、私がこういうこと言うかということ、ある講演で非常に影響を受けたことがあります。何かを誰かにしゃべってもらったら、みんなのレベルが上がるなんて、そんなことはあり得ないです。しかし、例えば100人いたら、1人か2人が変わってきて、生きざまが変わり、周りが育ってくるなど、その人たちが先の将来をつくってくれる。

だから、100打数100安打を狙ったものでなくて、100打数1安打、100打数0.5安打でも結構ではないかと思います。そういうことをできるだけ差し伸べてあげる、機会をつくってあげることが必要ではなかと思います。

**(議長)**

実は我々も今そういうことをしてしまして、「キャリアデザインワークショップ」という言葉。学生に自分たちで聞きたい人を決めさせて、自分たちで交渉して、自分で聞くというようなことを企画しております。先生方の方から聞きなさいというと、学生は「知らんよ」みたいなものが多いですが、自分たちで選んで、自分たちで聞くと、やはり自分たちが選んだ責任があって、より積極的に、今の言葉でいうと「アクティブ・ラーニング」のようなことを実施できることを期待して、今年は、宇部興産にお願いをして、リストを出していただく関係で、そういうことをしようとして、来年以降、本格的に行おうと思っています。そういうやり方もあるのではないかと考えています。そうしますと先程の100人中2が100人中10ぐらいまで持って行けるのではないかと感じています。

**(千葉委員)**

そういう意味もあって、宇部高で僕は同窓会「かたばみ会」という会長をしてしまして、ちょうど渡辺翁生誕150周年記念ということで、去年、文化勲章を受けられました本庄先生を呼んで、文化会館でお話をいただきました。私も本庄先生の本を読みましたが、一応科学者の端くれなので、使っている言葉はわからないことはないんだけど、途中でわけがわからなくなって、最後はこういうことだ、入り口と出口だけわかった。前日に先生と一緒に飲んだら、あの本は難しかったと言ったら、いや、前と後ろさえ読んでいただければ十分です。そういう講演をしていただいた。それもできるだけ若い人に出てくれるよう呼びかけましたが、この中にも何人かいらっしやっただけども、その人たちが、そういう講演をしていただいたから、こういう効果があったということはないけども、チャンスとして何かあるかもわからないと期待感を抱きながら続けていくと、何年かに1回、いいことがあるのではないかと思います。

**(議長)**



ほかの話題で、何かございますでしょうか。

**(山田委員)**

産業技術センターも独法になりまして、平成25年度で1期5年が終わりました。今年から2期目に入っております。2期目の大きな取り組みは、職員の人材育成ということ掲げております。私どもは独法が初めてということで、1期目は仕組みを作って動かすことに専念をして、どうか評価をいただくまでに至ったのですが、2期目に至っては、そういった仕組みをしっかりと効果的に動かして、地域でのものづくりを加速させていきたいということを大きな目標に掲げております。その点も含めて人材育成をやりたいというふうに思っております。

その際に、今までの議論にも少し関わることですが、どういった視点で、目標を持って人材育成をするか。先程、千葉会頭が申されたように、目的があると思います。私も今年1年は、初めは人材育成で走ってきた感がありますが、改めて所内にワーキンググループを作って、3年ないし5年の人材育成計画を職員と一緒に作っていききたいと思っております。そういう情報共有することで、一人一人のやる気に繋がっていくのではないかと思っております。

先程言いましたように、目標をしっかりと作って、目標と人材育成がどう繋がるのか分かりやすく説明することが、人材育成においても必要ではないかと思っております。ですから、大変恐縮ですけども、私のほうから今後2期目5年間のミッションを出しておりますので、それを達成するために、こういった事業をやります。そのためにこういうスキルがあります。あるいはここにありますように、豊かな心とすぐれた感受性といったような、横断的なことについても、その中に網羅をしていく。そういう取り組みの見える化を少しされると、共有化が進んで効果が上がってくるのではないかと。我々も、今始まったばかりですから、人に言える成果が出ている訳ではないですが、是非一緒になって取り組ませていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

**(校長)**

ありがとうございます。

基本的には、先程お示ししました教育方針に基づきまして、“技術者である前に人間であれ”ということとしっかりと教えていこうということ、その後、昨今言われています“学生自身が自分から進んで学ぶ”という姿勢を身につけるように、そのような科目の内容、配置の仕方を考えております。現在、教員について、工夫はしておりますが、いま一度それを見直し、より有効なカリキュラム体系等を検討しているところでございます。

国立高専機構は、51の高専に必要最低限のこういうことは盛り込みなさいという“モデルコアカリキュラム”の要請がございます。それを平成27年4月から本校は取り入れて、必要最小限はここだと。それにプラスアルファは各教員、或いは各学校の中で工夫を盛り込んでいくという、そういう形をとっていかうと考えています。

もちろん今後の教育の仕方について、日本の場合には一方通行的な教育が主でしたが、今後は“双向向”、学生が積極的に関わっていくような授業体系（PBLとよく言われる）、例えば企業さんからいただいたテーマを教員と学生が一緒になって講究していくというようなことも取り入れていきたいと考えております。

**(議長)**

読書感想文コンクールですが、今の高校生などは本を読まない。本を読まない子たちに本を読ませて、更に読書感想文まで書かせるとなると、並み大抵の努力じゃないと思いますが、何か工夫というのはございますか。

**(副校長)**

読書感想文に関しては、担当教員がそれぞれ書き方というものを授業の中で説明し、課題図書も10冊から12冊ぐらい読んで、その中から書きやすいものを選びなさいというふうにしております。

本を読む、読まないという話では、読書感想カード、一行感想カードというので、1年間で20冊以上読みましょうというのを課題にしていますが、やはり読めない学生は5冊程度しか読めないという場合もあります。カード、裏表で20冊ですけども、5枚も6枚ももらいに來る学生もいます、100冊以上読む子もいます。ただ100冊以上読む子が立派な感想文を書けるという訳ではないですが、ポイントを押さえた文章の書き方というのを、それぞれの教員が一応教えておりますので、それに対して何とかコンクールに残るものが書けているのではないかと思います。底辺はかなり下のほうで広がっております。

以上です。

**(議長)**

感想文は、実際、先生方のほうが手を入れられるのですか、学生が書いたままですか。

**(副校長)**

以前の8月までが夏休みの場合は、高校の地区の感想文コンクールに出す際、ちょっと手を出しておりましたが、今はそういうことはありませんので、ほぼ学生だけです。手を入れておりません。

**(津田委員)**

議長がおっしゃったこと、私も本当に思っております、電車に乗りますと、今の若い人たちはスマホばかり。私たちの頃は、皆、文庫本を読む。本当に今の子供たちというのは本を読まない。以前、NHKの番組「クローズアップ現代」で本を読むということの大事さということを訴えていました。読書感想文を書くために読むということもあるかもしれませんが、本を読むということを若い子たちにさせていただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

**(千葉委員)**

1年生のところで高専手帳という説明がありました。これはどういうシステムでしょうか。

**(校長)**

これは香川高専と共同で作っているもので、いろいろなことが書かれています。要するに試験の範囲とか試験の期間とか、それから下のほうには技術系が学んでほしいテクニカルターム等もありまして、それによって一応自己管理ができるように、薄いものですがこれを使って日常のスケジュール管理などをやっております。

**(千葉委員)**

今の読書感想文を書くということに対して、手帳に書くということが大事ではないかと思いました。自分の経験ですが、会社に入ったときに、上の人が何かあるとすぐ手帳を出して書くわけです。何で書くのだらうと思ったのですが、若いときはみんな来週何があるというのは全部覚えてますし、考える量が少

なかったからだと手帳を自分が使うようになってわかりました。

だから、手帳を少し充実させ、薄いのだったらもっと厚くされて、書く、読む習慣を作る必要があるのかもわかりません。何かここにヒントがあるような気がします。

**(校長)**

ありがとうございます。

**(議長)**

メモをとる習慣。最近、メモをとらないで、生徒がスマホを出して写真を撮る。本当、考えないといけないところである気がします。

**(徳永委員)**

特色ある取り組み4のところ、企業説明会とインターンシップ先企業紹介というのがありますが、当社もこの制度を利用させてもらっています。担当者に聞くと、マンネリ化といいますか、逆に今の学生さんたちが企業に求めるものなどを前もってあるとより身近になるのではないかと。どこかで説明会をやればいいということではなく。学校側からも学生さんの意見を取りまとめてもらって、企業に聞きたいことを千葉さんが言われた文字の表現にも繋がり、そのあたりをやってもらったほうがいいのではないかと思います。

**(校長)**

ありがとうございます。実は私は1年目で説明会を見ておりません。この2月にありますので、十分に観察して、より充実したものにしたいと思います。

**(徳永委員)**

それともう一つ、質問ですけど、進路状況のところ、昨年度は就職が148名。県内33名。これは個人の考え方もあり何とも言えないでしょうけど、宇部高専さんとしては県内の就職についてどのように重きを置かれているのか、逆にこう書かれているから何か意図があるのか、県内の企業が採用してくれないからこんな数値なのか、そのあたりどうなのでしょう。

**(校長)**

これにつきましては、赴任したばかりでなのでわかりませんが、一般的に高専の場合には、学校の方からここはどうかとはせずに、学生の意思で決めているというのがほとんどでございます。宇部高専の場合もその傾向だと思います。

**(徳永委員)**

学校から県内の企業へではなく、学生さんの希望が第一だということですね。

**(校長)**

そうですね。ただ今後、県内の企業さんにも人材をもっと供給したほうが良いというようなお声も聞きますので、我々のほうも、その辺のところは十分に配慮したいというふうに考えております。

**(師井委員)**

中学校の立場として、子供たちを受け入れていただいて感謝しています。就職や進学の内定率が非常に高いということで、中学校側から見れば、宇部に宇部高専があるのは本当に素晴らしいということ、本当感謝しております。

今年、上宇部中学校に赴任して思うことなのですが、ものづくり・理科教室などで、小中学校にたくさん出ていただいて、うちの学校は卒業生が定期テストの前に来て、放課後に補充学習としていろんなことを教えてもらえます。校区を大事にしてもらってありがたいと思っています。

この前は上宇部校区の文化祭のとき、サイエンスコーナーで、いろんなロボットを小さい子供たちに興味づけておりました。そのそのときの学生さんたちが上宇部中の出身ですが、地域の住民としての役割を担っているという、そういう感覚が見えましたので、地域を大事にするということから見て、2つぐらい考えることがあります。よく先生に言いますが、地域というのは2つあるということによく言います。

自分が住んでいる地域と、職場の周辺の地域。その2つを大事にする側面からいえば、上宇部中出身だけではなく、遠くから来た学生さんたちも中学校のほうに来ていただいて、いろんなことを教えていただくというのは、非常にありがたいことだということを思っていますし、どんどんそういうことが増えればと思っています。

もしよければ、お忙しいでしょうが、先生方も年に1回とか来てくだされば、子供たちが興味、関心を理数系統に向けたり、優秀な子をもっとできるかもしれないということを思っています。先生方が難しければ、例えば退任された先生方もこの周辺に居られると思いますので、是非受け入れを多くして、そういう学校づくりを今進めています。

コミュニティ・スクールといいますけど、是非、こういう優秀ないい学校があり、宇部の財産とと思っていますので、そういう学生たち、先生方、退任された先生方も是非学校にたくさん来ていただければということを実に思いました。ここ最近、高専生のすばらしい姿を見せてもらって感謝しております。これからもどうかよろしく願いいたします。

#### (校長)

ありがとうございます。私たちにとりましても、学生諸君が後輩の皆さんにいろいろとお話をしたり、実験を指導したりするのは学生たちにとっても大変勉強になりますし、宇部にあっての宇部高専でございますので、地域の市民の方々へのいろいろなサービスといいますか、先程、徳永委員からお話がありましたが、国立高専の使命は、地域への人材供給というのがございますので、現在2割か3割が地元山口に就職ですけども、この割合を増やすというのも一つの我々にとっての使命でございますので、工夫をして、少し数値を増やしていくという努力も必要と思っております。

#### (議長)

地元の企業側にもたくさん受け入れていただけると我々としても高専も大学も幾らでもいい人材を出しますので、よろしく願いいたします。

議題1に関しまして、何かほかに御意見等ございますか。よろしいでしょうか。

それでは、次の議題2にまいりたいと思います。議題2は、宇部高専の国際交流の取り組みということで、藤田専攻科長のほうから御説明お願いいたします。

#### (国際交流室長)

宇部高専の国際交流の取り組みということで、説明させていただきます。

先日、山口大学さんのほうでグローバル人材育成の推進事業のシンポジウムを聞かせていただきまして、それに比べますと本校の取り組みというのは小規模ではありますが、高専の中では比較的活発に取り組んで

いるというふうに自負しておりますので、その状況について説明させていただきたいと思っております。

まず、本校の国際交流の大きな契機というものについて簡単に説明させていただきます。

平成19年から21年までの3年間にかけて現代GPに採択されまして、この現代GPの中で学术交流協定校を広げる取り組みをしております、現在に至っております。

現代GPの“東北アジア地区交流による実践的技術者育成“というものは、どういったものかといえますと、目的としては、本校の学生に国際的に活躍できる技術者を養成すること、それともう一つは地域ということで、宇部市の地域活性化への貢献というものです。内容としましては、学术交流協定校との学术交流、或いはインターンシップ。その中で特別研究、或いは卒業研究、そういったものを取り入れて、東北アジア地区の機械産業都市連合への連携につなげていくことであります。

内容の2のほうについては、なかなか難しいところがありますが、いわゆる1の協定校との学术交流、或いはインターンシップといったものは、この現代GPを契機に終わった後も引き続き継続して、さらに発展させていくという状況になっております。

本校が協定を締結しております大学を締結年月日順に示しております。

ニューカッスル大学は、基本的に英語の語学研修のための協定をしています。

東義科学大学は、韓国の釜山にあります2年制の大学ですが、海外インターンシップ、或いは海外研修を行っております。

ハルピン工業大学は、中国の威海にあります、海外インターンシップ、或いは海外研修をしております。

ロシアは2つありまして、コムソモリスク工科大学とアムール人文教育大学は海外研修をする協定校になっております。

一番下は、今年協定を結んだ台湾にある国立聯合大学で、異文化体験研修をするための協定を結んでおります。

これらのうち、ハルピン工業大学、コムソモリスク工科大学、アムール人文教育大学の3つは現代GPのときに協定を結んだ大学です。

具体的に研修内容について、説明させていただきます。

まず、語学研修は、先程も言いましたように、英語の研修でニューカッスル大学にELICOSという語学研修のプログラムがありまして、基本的には5週間サイクルで組まれており、本校の学生は夏休みの8月の終わりから9月にかけて5週間行くような形になっております。それに加えて、ホームステイ先を紹介していただいておりますので、ホームステイ先との交流をさせるものになっております。

海外インターンシップですが、専攻科生については、基本的にインターンシップは必修です。インターンシップは県内の企業さんや全国の企業に行っている学生もいますが、そういったインターンシップがメインですけれども、それと選択のような形で海外インターンシップに行った場合には、それはインターンシップとして認める形になっております。内容的には自分がやっている研究内容を英語で発表する学術発表会。行く大学によって違いますが語学研修。ただ、インターンシップということなので、ただ発表するだけではなくて、もう少し実習的なものをするということでプロジェクト研修、工場見学、こういった内容の海外インターンシップになっております。

海外研修は、本科生の高学年ですけれども、同じように協定校に行って、基本的には学科との交流の中で、まだ研究内容については発表できるレベルになっておりませんので、山口県ですとか、宇部市ですとか、或いは宇部高専ですとか、そういったものを向こうの学生に英語で紹介するといったものが主な内容になっております。

異文化体験研修は、今まで本校のほうでは低学年を対象にした海外研修が増えておらず、組まれてもおりませんでしたので、去年、低学年をターゲットにしたいいわゆる海外の異文化を体験することを主な目的とした海外研修として、今年、台湾の聯合大学で始める予定にしております、来年の3月に9名程度、低学年の学生が行くように計画を今進めているところです。

今日はその中で海外インターンシップの内容について、少し具体的に紹介させていただきます。

4頁の左が今年、韓国の東義科学大学で行われたプログラム、右のほうが中国のハルビン工業大学で行われたプログラムで3週間。教員のほうは一番右側に書いてありますけれども、最初の1週間と後半の1週間。中間の10日間ぐらいは学生だけが向こうに行っているという形になっております。ざっくり言いますと、大体午前中は語学研修で、韓国に行った場合には韓国語の研修、中国のほうに行った場合には中国語の研修、午後からはプロジェクト研修ということで、向こうの先生方から英語等で教えてもらいながら実習をするというふうな内容になっております。それは約3週間になっております。

プロジェクト研修、これも幾つか準備されておまして、本校の機械とか電気とか制御の学生向けのプロジェクト研修になっておまして、オートモーティブ・プログラムというプログラムの名前をつけております。これは韓国の東義科学大学ですが、自動車会社と連携をした大学になっておりますので、設備自体がかなり本格的なものが準備されておりますので、その設備を使わせていただいて、いろんな実写的・実務的なものを経験させるというものになっております。

これとは別にIT研修と言っていますが、携帯などのアプリを作成するプログラム。プログラムを組んでアプリを作成するようなもの。写真を準備しておりませんが経営系ですとか情報系の学生にはまた別に準備をしております。

そういったプロジェクト研修。これは最近、海外インターンシップにふさわしい内容にするということで、新たに取り入れた取り組みになります。

それとは別に放課後、毎日自由時間にしておまして、向こうの学生さんと積極的に交流させるということで、スポーツ交流、或いは休みの日には一緒に食事に行くとか、プロ野球観戦に行くとかいったこともさせておまして、これは向こうの学生さんはかなり積極的で、英語力も非常に高いので学生との交流の中でかなり刺激を受けるとか、効果も出ていると考えております。

7頁は、今までは本校の学生を協定校に送り込むことだけでしたが、去年ぐらいから向こうの学生さんも本校に受け入れて、インターンシップのような形のものを始めております。去年、韓国の学生さんを受け入れたときの様子で、このときは向こうの学生さんに研究内容を英語で発表してもらう。それにあわせて本校の学生も研究内容を英語で発表するという、いわゆる「スチューデントカンファレンス」という言い方をしていますが、研究の発表会などを行いました。そのときの様子で、うちの学生が発表しているところ、向こうの学生さんが発表しているところ。このときには教員の方も引率で来られていましたので、ちょっとした情報交換会というものをホテルで企画いたしました。韓国の他、ロシアのほうからも毎年

るようになっております。今年4月にも来ましたし、去年の4月にも来ております。そういったことで受け入れのほうも徐々に広げていくような状況になっております。

今年からの取り組みですが、学生に国際化の雰囲気、要するに英語を使う機会を少しでも増やすということで、当然授業はありますが、イングリッシュカフェというネイティブの人に本校に来ていただいて、毎週金曜日の放課後に希望する学生はそこに行って、ネイティブの人と世間話、日常的なことを英語で話させるようなものも今年から始めました。

さらに、海外研修に行った学生には、報告会で報告をさせています。これは報告をさせるだけでなく、国際交流に興味がある学生に、どういった経験をしてきたかというのを知らせるという意味合いも含めて行っていたのですが、今年からオールイングリッシュということで、学生の発表も英語、質疑・応答も全部英語でさせることをやりました。最初、できるか心配しましたが、意外とやらせてみると結構活発な報告会になったと思っております。これも今年の新たな試みになります。

現代G Pからの国際交流の参加者の推移をここに示しています。この3年間で一応交流協定を結んで学生を協定校に送るという基礎をつくって、その後、徐々に増えていく訳ですが、ニューカッスルの英語研修に行く学生の数がかなり増えるようになりました。最近では1年間、休学して、1年間向こうのほうに行くという学生も数名ですが出てくるようになってきて、国際交流のいい傾向ではないかと考えております。

ただ一方で、ロシアのほうは毎年4名を上限に行かせていますが、平成25年度はアムール川が氾濫して、ぎりぎりまで行かせる方向で計画しましたが、鉄道等のインフラが全然機能していないということで、やむなく断念したこと、或いは中国ですけれども、平成25年度は尖閣諸島の問題、PM2.5の報道等の影響で、学生の希望者が全然なかったということで、この年は結局中国のほうには誰も行っていません。なかなか難しい面もあると考えております。

更には、海外インターンシップについては、韓国の大学でプログラムの充実等を進めていたのですが、韓国の少子化が日本以上に厳しく、大学の改革が国主導で進められているということがありまして、突然、向こうのほうから大学の組織改革を進める上でいろんな事業等の見直しを図るということで、来年からは国際交流を中止させてもらいたいということがありまして、人数や実績も含めて多いところなくなってしまいうものもあります。だから、幅を広げて、国際交流の提携校も広げておかないと、突然の環境の変化などがあるということを感じているところでございます。

今後の課題ですが、一つはプログラムの充実。今幾つか交流協定校あり、そういったところに学生だけを送るだけでなく、在外研究員制度も利用しながら教員を向こうに派遣して、更にパイプを太くするとかして、プログラムの充実につなげて行きたいと考えております。

私は国際交流室長をしていますが、ずっとやるものではありません。向こうのほうは国際交流室というのがあって、それに専任の方がおられますので、本校も同じように事務側に国際交流の専任の者をつけて、担当者が交代したり、国際交流室長が変わっても滞りなくできるように組織、或いは体制の強化といったものが重要であるということで、事務職員に国際交流専任の方を配置していただくようになっております。

最後、国際交流、学生への支援ということで、JASSOのほうで本校が行く学生に対する奨学金制度がありまして、今年行った学生にも7万円とか6万円の費用を負担、支援していますが、今後は向こうか

ら来る学生さんの受け入れのための奨学金もありますので、積極的に活用して、さらに国際交流を活発にしたいと考えております。

以上、本校の国際交流の取り組みについて説明させていただきました。

**(議長)**

ありがとうございました。どこの学校も国際交流は非常に一生懸命ですけども、やってみるといろいろと問題といったことはありますが、ただいまの説明に対しまして、委員の先生方、御質問、御意見等ございましたらお願いいたします。

**(千葉委員)**

応募される場合に、人数の制限があるとしたら、競争率は何倍ぐらいですか。

**(国際交流室長)**

定員はもちろんありますが、東義、韓国の大学は来年からなくなります。今までは10名程度までは大丈夫なようです。中国はもっと多くて、20名ぐらいでもいいと大学は言っていますが、それを上回る程、学生の希望はありませんでした。ロシアだけは、治安等の問題や受け入れ体制もありますので、4名を上限にしておりますが、今までそれを超えるようなことはありませんでした。

**(千葉委員)**

私たちの時代、英語が話せることは評価が高くなかった。しゃべれないのが当たり前で、話せるのはプラス。今の若い方は話せないとマイナスという時代と思います。ですから、国際語としての英語を手段として研修をする、海外を知るということです。そうすると中国語も将来は大事になると思いますが、中国語の研修会はカリキュラムとしてこの中にあるのですか。中国語や韓国語もそういったカリキュラムがあって、海外に行かれて磨いておられるのか。

**(国際交流室長)**

韓国語はないですが、中国語は一応必修になっておりまして、授業にもあります。現代GPにおいて協定校と結んだことが関連して取り込んでいます。

もうひとつは、向こうに行って、前半中国語や韓国語を学ぶというのは、少しでも文化などを理解する上においても語学を少しかじるというのは、いろんな意味でためになることも含めて、午前中はそういった語学研修をするようにカリキュラムを組んでいます。

**(議長)**

学術交流協定締結校というので6大学ですが、他にはないですか。

**(国際交流室長)**

アメリカのニュージャージー工科大学というところがありますが、海外研修をする相手にはなっていないので、ここには書いていません。それが全てです。

**(議長)**

東北アジア地区交流という現代GPの狙う方向が北アジア、東北アジアということで、中国とかロシアとか韓国というような国々と結んでいる。今後どういう方向を考えておられるのでしょうか。

**(国際交流室長)**

基本的には、ほかの高専さんはヨーロッパの大学の方に行かれますが、本校としては、まず基本的には



学生の負担が余りかからないということで、オーストラリアは若干高いですけども、それ以外のところは比較的近いですし、学生の負担も少ない。JASSOのような補助金をもらえば、交通費ぐらいは全て出るぐらいなので、そういったアジア地区の大学に広げていきたいと私は思っています。

なお、ニューカッスル大学は、今までは語学研修だけの提携校だったのですが、今後、先方の教員を招聘したり、あるいは学生さんを受け入れるような計画も進めておまして、語学研修だけではなくて、他の大学でやっている海外研修のようなものをニューカッスル大学のほうでもやっていきたいというふうに考えているところです。

**(議長)**

山口大学は、どちらかという東アジアというよりも東南アジア。タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア等とこれから仲よくやっていこうと思っています。

この前、マレーシアのUTM (マレーシア工科大学) に行ってきましたが、英語力のはるかに高いですね。TOEIC 930点ぐらいの子がいて、びっくりするような成績をとっているのです。そういう人たちとうまくコミュニケーションがとりたいと思っています。

ほかに何か、ございますでしょうか。

**(山田委員)**

お尋ねしますけれども、先ほど校長が学生数約1,000名で、その中で、年間で大体30名前後ぐらい、単純には0.3%ぐらい。それで、その他大勢の海外に行っていない方がいらっしゃると思いますが、そういった方々に対する国際性を身につけるということで、どういったアクションを起こされているのか教えていただきたいと思っております。

私ども産業技術センターには、今年、アルゼンチンから半年ぐらい受入れておまして、県の国際課を通して、毎年、研修生を受けておりますが、こういう形での海外研修という制度では今のところないので、効果を教えていただきたいと思っています。

**(国際交流室長)**

先ほど申しましたように、向こうの学生さんにこちらに来てもらい、授業などにも連れていったりすると交流ができます。もっと受け入れのほうを活発にして、学生に触れさせると、また意識が変わって、自分も行ってみようとか、そういった効果につながるのではないかと考えています。

**(山田委員)**

おっしゃるとおりだと思います。受けるころは大変そうですが、先生がおっしゃっているように受け入れる場合に、当然、受け入れ方にもよりけりだと思いますが、態勢的には行けそうだという感触でよろしいですか。

**(国際交流室長)**

まだ韓国とロシアの学生しか受け入れたことがないのですが、経験はしていますので、どこの大学から来られても、基本的にはそのプログラムで回せますし、一応寮のほうも10名程度ぐらいであれば、受け入れるキャパを確保していただいていますので、宿泊の面も問題はないので、10名程度ですけども、いろいろなところから来ていただくような受け入れができるようになると思います。

**(山田委員)**

ぜひ頑張って幅広く行ってください。

**(議長)**

宇部高専海外研修報告会ですが、実際に参加する学生さんたちの印象というのはどんな感じですか。報告会に行くと、自分も来年は行きたいとか、そんな印象があったのでしょうか。

**(国際交流室長)**

それはあります。行った学生は、かなり刺激を受けますが、なかなか継続していかないようです。だから、イングリッシュカフェもやっているの、来年からは海外研修に行きたい学生はイングリッシュカフェには必ず参加させようと思っています。生の声を聞くと低学年のほうも刺激を受けます。今年から始めた低学年対象の異文化体験研修も10名程度の募集に対して9名ほど手が挙がっております。そういったものは1回、低学年で行って、更に高学年でというふうにして、うまく回ってくるのではないかと考えています。

**(議長)**

定員以上に人気が出てこない、みんな行こうよという気になかなかならない気がします。また、よく言われるのは、行ったことによって、どれだけ効果があったのか測れと結構言われているので、TOEICの成績が何点上がったなど、そんなところに陥らないように、少しうまいやり方を考えたらいいのではないのでしょうか。

**(千葉委員)**

本学は工学系ですね。これは非常にやり易いですね。私の経験では、テクニカルタームというのは割合共通語がある。しかも、図面という共通語がある。ポンプの絵を書けばそれはポンプですね。そういうものを使ってやるということですね。ニューカッスル、語学研修と書いてあるけども、本来、あるテーマを持って、共通のところがあるものを、5週間も居れば通じますね。ですから、あるテーマを持って、いろんな共通語を使うと技術系の場合には非常に入りやすい。少々何もできなくても入りやすい。日常の会話のほうがかむしろ難しいですね。テクニカルなディスカッションの場合にはイメージーションがわかりますね。そうすると自分の主張ができる。場数を踏めば、できるようになります。

**(校長)**

先日、ニューカッスル大学の副学長と国際交流室の先生が来られたとき話しましたが、我々としても千葉委員がおっしゃるような形で、学生を向こうに行かせ、そのときに向こうと同じような研究をしている先生と学生に来てもらって研修の機会をつくるとか、あるいは本校で受け入れて、そういったことを行うなど、来年度以降検討しようと思っています。

それともう一つ、ニューカッスル大学の先生に1年間来ていただく或いは、短期で例えば2週間来ていただいて、集中講義を英語で授業していただくということも、お願いはしております。

また、国立高専と技術科学大学（豊橋と長岡）の3機関連携による全国高専を結ぶテレビ会議システムを構築していますが、いいレクチャーがあれば近隣の高専にもそれを配信して共有する、或いは他高専の先生の授業を聴講するというのも可能ですので、なるべく多くの学生たちに生の英語を聞かせるとか、そういったことも来年度以降、実現したいと考えております。ぜひ千葉委員がおっしゃったようなことを来年度の運営諮問会議では御報告できればしたいと思います。

(徳永委員)

質問ですが、インターンシップのプロジェクト研修のテーマはどのように決められているのですか。

(専攻科長)

基本的には本校の要望は伝えますが、相手先のほうで考えていただいています。

(徳永委員)

学生さんには専門があると思いますが、専門に近いところということでしょうか。

(専攻科長)

そうです。

(徳永委員)

研修期間はどれぐらい。3週間くらいの中ですか。

(専攻科長)

そうです。午後に基本的にプロジェクト研修です。

(校長)

ハルピン工業大学でも同じです。化学系の学生が向こうに行きまして、RNAの抽出、そういうのを勉強しています。

(徳永委員)

「慣れる」といいますか、海外では、接していると接してないのでは全然違います。海外留学へ行っても、よほど英語で苦労しない限り、涙が出るぐらいじゃないとしゃべれるようにはならない。海外の文化、カルチャーに触れるというのは大きな財産だと思うので、そのあたりをアピールする必要があります。

(千葉委員)

私は国際会議5回ぐらい出て、パネリストもやりましたが、ただしゃべる内容を聴衆が聞いてくれるかどうか会議のポイントです。ということは専門を通じて勉強することが一番大事。この基本を絶対忘れてはいけません。自分の専門、それがあって、国際的な場でいろんな話ができるかどうか。その手段として英語があります。学生にきちっとしたベースは勉強する、それが本分であることを伝えなければなりませんと思います。

(師井委員)

海外に行った経験というのは、すごく生きると思います。海外でのカルチャーとか国際性を養うというのは、非常に大事な観点と思っています。できればこういう経験をされた学生さんに学校に来ていただいて、子供たちにパワーポイントなどを見せていただきたい。子供たちに地域貢献の意味とか、社会を担う国際性を養うという意味からも、是非本校に来ていただいて、子供たちがこれはいいとか、海外へ行きたいという思いになるようなプレゼンをしていただきたい。

(校長)

先程の卒業生でJAXAに就職した浅村さん。実はニューカッスルに行った経験がありまして、私もニューカッスルに今年行ったときに、JAXAに行った彼はどうだと聞かれました。そういう点でも、そういった積極性のある学生というのは、非常に卒業後もいろんなところで活躍するというの言えるようです。オーストラリアに行ったときも、彼は非常にリーダーとしてまとめて、オーストラリアの先生方にも

印象が残っています。

**(議長)**

我々が思っている以上に英語というのは難しい。また、いろいろな国での英語があり、総称して「グローバルイングリッシュ」などと言っていますが、いろいろな英語に触れるというのも非常に大事で、CNNで話しているのも英語だし、UKで話しているのも英語です。私はよく仕事でインドなどに行きます。最初は理解できないですが、しばらく聞いていると、わかるような気になってくるので、そういう体験ができるのが英語が楽しくなってくるのではと思いますし、千葉さんがおっしゃったように、専門性がしっかりしていると、そこで共通の話ができる。専門性をきちっと教えた上で英語ができるような学生をつくるというのは、大学も高専も同じで、是非これからも一緒に取り組んでいきたいと思います。

ほかに何か御質問ありますか。

**(山田委員)**

お願いをさせていただいてよろしいですか。先ほど申しましたように、当方もいろいろな動きをしております中の一つに、地域の中で、これから県内でものづくりをされそうな方々、高専の卒業生であったり大学の卒業生だったり、より重点を置いている工業高校の方々にセンターに来ていただいて、見ていただきたいという話をしています。

先ほど高専の学生も二十数%、地域に残って仕事をされていますが、学生さんを可能な限り当方に連れてきていただいて、地域のものづくりの接点という立場で何をしているのか、本校の卒業生もうちで活躍していただいています。そういった諸君とも接点を作りたいと思っています。是非御検討いただければと、よろしく願いいたします。

**(校長)**

ありがとうございます。是非検討したいと思います。

**(議長)**

いろいろな御意見をいただきましてありがとうございます。以上をもちまして、議事を終了したいと思います。ありがとうございました。

## **(7) 校長謝辞**

本日は本当に貴重な御意見を承りましてありがとうございました。辛口の御意見も、辛口なほど我々にとっては参考になりますので、来年度に向けて一層努力をしたいと思っています。

最初にも申し上げましたとおり、これからの50年は全く先が見えません。国立高専51校が必要かどうかという議論も始まっているようでございます。その中に宇部高専が入らないように、我々は優秀な人材を送り出す機関であり続けたいと思っています。

貴重な御意見をこれからも我々に届けていただき、我々の応援団になっていただければ、これにまさる幸せはございません。我々としまでも、地域の振興が一番大事でございます。そこに人材を供給できる機関であり続けたいと考えております。今後ともよろしく願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。

## (8) 閉 会

総務課長の進行により、運営諮問会議が終了した。

## (9) 特色ある研究の視察

機械工学科 南野教授の太陽光発電システムの視察が行われた。